

元曉の仏教は極めて広範に互るものであるが、その学問は玄奘の新訳仏教に対する関心から始まり、ついにその仏教学の眼目は新訳と旧訳とを如何に会通統合するかというところに至った。元曉の功績は、和靜大師といわれ十門和靜論の著述が示すように靜論や種々の教説の会通にあった。従つて元曉の学問は通仏教的で宗なき仏教の様相を呈するが、彼の宗とする所を強いて求めるならば、それは起信論であらう。数十部と云われる著述のうち起信論に関するものが群をぬいで多いのである。更に一道章、二障義と呼ばれるものも、実は起信論一道章であり、起信論二障義なのである。このことは元曉の教学における起信論の地位を物語るものであらう。

近世美作地方の後山山上講

——その成立過程について——

豊 島 修

近世修驗道史究明の一課題として、山伏・修驗の徒が、いかにるかたちで地方庶民の精神生活と交渉をもつて展開をとげたかが明らかにされねばならないのである。即ち定着山伏や村落修驗の宗教的活動が、宗教儀礼や信仰面において庶民といかように結合し、史的変遷をしたかに注意せねばならないと思われる。そこで、このような課題追求の一手立として、近世の村落社会における宗教現象の著しい特徴の一つである山岳信仰的な講をとりあ

げ、美作地方に限定して考察したい。美作地方の山岳信仰的な講は、(イ)大峯山上講、(ロ)後山山上講に大別されるが、以下、後山山上講究明の基礎作業として、その成立過程について検討することにした。

後山ゴサンは美作の北東部に位置し、播磨、因幡の二国に隣接する標高一、三四五米の山である。この後山の古代、中世に関しては、今日ほとんど明らかにしないが、後山信仰が独自の展開をしてくるのは、一般に近世以後、とくに江戸中期以降と考えられる。

すなわち後山は元文年間頃(一七三六―一七四〇)に大峯信仰の流布があり、大和の大峯山上の地名や行場をうつして修行場となった。『美作鏡抄』に「大峯退転のころ、近国の山伏(傍点豊島)仮みねと称して参り、七月十八日、八月十五日(傍点豊島)参詣多し」とあり、江戸中期に大峯山の「仮みね」

―後山に登れば大峯山に登拝したことになるという信仰―の表出を知るのである。これは大峯信仰の近世の変質として注意せられるが、また、この大峯信仰の流布、浸透によって、後山(行者山)は東の大峯山に対する西大峯という信仰関係が成立したものとと思われる。ともかく近世の後山は、大峯山の「仮みね」の成立期を境に、あらたな展開を示すことになる。それは一に、地方山岳靈場としての後山が修行靈場の性格をもつに至ったことである。具体的には、それまで大和の大峯山で登拝修行(入峰儀礼)をしていた近国在地の修驗の徒が、後山の奥之院で柴燈護摩修行や、東・西両行場における儀礼化した練行修行がおこなわれた。

いま後山の奥之院を拠号とする東西行場について、文化七年の『西大峯由来縁起』、『西大峯行場記』等の資料によると、後山に

は四十八ヶ所の行場があり、これら各行場をまわる抖擻修行の形態を指摘し得る。また後山修験行場を大峯山上の行場と比較すると、岩屋の行場が多いところに後山の特徴があるが、その名称等は大峯山上の行場とさほど変わることはない。これは後山が「大峯山上の地名を模」し（東作誌）、修行場となったことを裏付けるものである。つまり近世の後山は、大峯山上の行場のミニチュア化したものであり、山伏修験徒は「大峯の立願」（後山靈験記）のため、後山に登ることによって大峯山の登拝をはたしたことになるという信仰があったといえよう。

このような立願の信仰は、既に中世の熊野信仰にうかがわれる。熊野詣が容易でなかった中世の庶民は、熊野山伏に代参を頼んだり、地方村落に設けられたミニチュア化した熊野三山を、一日で詣でることにより熊野詣の立願がはたされたとする信仰と同じである。したがって山伏集団の後山抖擻修行や、後に述べる後山代参者による後山登拝も、一つには大峯の立願の目的のために後山行者山にのぼり、信心して願開きをする信仰があったと考えられる。

このように近世の後山は、大峯信仰と結合して修行霊場的性格を示すとともに、大峯の立願を後山ではたすという庶民信仰がうかがわれるのである。これは美作を中心とする近国在地の修験徒の修行形態と信仰をあらわしているが、こうした山伏集団の後山登拝にともなう信仰形態は、必然的に後山信仰を美作庶民（『農民』）に浸透させたと思われる。それは一般農民を後山へ登拝させる信仰組織としての後山山上講を確立したことでもわかる。

周知のように、このような講集団は一般に山岳代参講と称され、山岳代参講は近世中期から末期に成立、展開したといわれている。ところで、美作における後山山上講の成立時期については明確でないが、管見では安永六年五月の「奉供養行者大菩薩講」と刻まれた山上講碑が初見である。また時代は降るが、文化五年の「採燈大護摩供養」札をもつ真庭郡落合町山根の山上講があり、苫田郡阿波村尾所の後山山上講は、それよりおそい嘉永二年四月に成立している。これらの講資料から、美作地方の後山山上講の成立は、少なくとも十八世紀後期に求め得るといえよう。そして後山山上講が一般的に増加するのは、江戸末期以降であると考えられる。

そこで次に、いかなる系統に属する山伏先達によって後山山上講が組織されたのであろうか。従来、後山山上講を組織した修験について、(一)美作に散在した真言宗の当山派山伏、(二)後山道仙寺の任命した後山先達の組織する山上講の二点を指摘されているが、さらに天台系の五流山伏太法院から任命された在俗出身の先達によって山上講が組織され、信者を後山に登拝させたことに注意したい。いまは詳細に触れられないが、文化八年の『差上申条々証文之事』という訴訟によって、江戸末期の享和元年四月から、五流山伏太法院が後山の奥之院で「参籠採燈大護摩」修行の伝統を復興し、それより毎年六月に、後山奥之院で採燈大護摩修行をつとめたことが知られる。文化五年の「採燈大護摩供養」札をもつ真庭郡落合町山根の山上講等は、五流山伏太法院から補任状をうけた在俗山伏が後山でおこなわれる五流山伏の採燈護摩修行

に参加し、併せ講員（代参考者）をこの護摩修行に導引させたことを物語るものであろう。

このような後山山上講の成立現象は、近世の後山信仰のあらたな展開を示すものといえる。それは美作の国峯である後山に大峯信仰がうつって、近国在地の山伏集団が働きかけておこった信仰現象であった。こうした後山をとりまく近国在地の修験の後山への働きかけを反映して、江戸末期になると、後山道仙寺が直接先達、山伏を任命し、後山先達が山上講を組織するに至ったことは注意される。既に先学の指摘がある如く、江戸末期から明治にかけて後山山上講は多数簇生しているが、その詳細な裏付けはなされていない。それを論じるではないが、歴史的には、後山道仙寺の二十三代座主舜応法印が、天保十四年から弘治年間にかけて後山修験の組織を確立・編成し、「後山修験道」（当山派）の法式を規定するほか、あらたに柴燈護摩修行の伝授がおこなわれたことを指摘しておきたい。この舜応法印の画期的な意図によって、あらたに生れた後山修験、先達が『後山御条目』をまもって正規の修行をつとめ、他方では村落内で活発な布教活動をおこなって、後山信仰を美作農民に浸透させたと思われる。その結果、各部落に強力な信者を輩出させ、後山登拝の信仰組織を簇生させたのであろう。

ともあれ、以上の考察から、美作地方の後山山上講は国峯である後山に大峯信仰がおよんだ近世中期後に成立し、山伏集団の布教活動を媒介にして、近世末期の天保年間から増加したものと結論づけられる。それは又、民衆信仰一般の展開する時期であり、

山岳信仰においても、山岳代参講が成立展開する時期と符合するものと考えられるが、この点については紙面の関係上省略せざるを得ない。後日、機会をあらためてその詳細な報告をしたいと思う。

註① 「東作誌」『新訂作陽誌』七、所収。

② 五来重教授「熊野三山の歴史と信仰」『古美術』42・昭和48年）。拙稿「地方に設定された熊野三山の信仰」『印度学仏教学研究』第二十一卷第一号）。

③④ 『美作の民俗』（昭和38年）

梁簡文帝撰法宝聯璧について

大内 文雄

前年の研究発表会においては、「梁代における仏教関係類書の編纂と諸経中要事について」と題し、梁代に編纂された仏教に関する類書の概要を述べた。今回は、それらの中でも最大の規模を持つ簡文帝蕭綱による法宝聯璧を取り上げ、その編纂に携わった人々にどのような人物がいたかを中心にして、些か考えている所を述べてみたい。

法宝聯璧は、歴代三寶紀卷十一によれば、簡文帝蕭綱が皇太子であった頃に、躬ら仏典を覽て分類を指図し、多くの学士を動員して編纂したものとある（④四九・一〇〇・a）。しかし、事實は、蕭綱が晉安王として雍州（湖北・襄陽）に居た頃から、既に